

NO. 16

March '94

Newsletters

神戸女学院大学
女性学
インスティテュート



神戸女学院出身の作曲家たちとともに
(筆者:前列左から3人目)

日本女性と音楽——作曲

飯田正紀

前回に巻頭文を書くよういわれましたが、まさに寝耳に水の驚きで、先ずは学長に敬意を表したのも束の間、はや本番となりにけりであります。女性学という言葉については諸々の方々が討議の対象となさっているのを見るにつけ聞くにつけ、私のおかれている環境——つまり女子大と音楽、女子大の音楽、音楽と女子、女子音楽——どれをとっても我が国では女子優位のジャンルの真っただ中に位置されている我が職業をふりかえるにつけ、今更、女性学云々というより何故、我が国の音楽人口は圧倒的に女性によって占められているのか、の方がずっと関心があります。

その理由として、日本社会の後進性。つまりお嫁に行くまでの芸事、女子供の音楽、日本男性の音痴性？芸術＝美術、音楽＝芸能などの一部の誤った認識、音楽は趣味の一部、経済的な負担大、等々。それに私が物心ついた頃の大人の考え方として、音楽は社会的に低い地位しか与えられていませんでした。この半世紀

でこれらの認識は可成り改められて来ましたが、現在音楽を志す者、或は音楽会の入場者数の男女の比率をみる時、進歩したと見えるのは皮相的で、日本社会の底流はそれほど変わっていないのを痛感します。更に商業的にまで音楽が利用されてくると、第三者ならずとも、やはり日本人はエコノミック・アニマルかなあ、と思ったりもして…。

私の専門、作曲は過去、女性に関心のうすい分野でした。古くは女性は理論的に弱いなどと云われ男性の独占が続いていましたが、我が国で作曲をしたいという女性が現れたのが今世紀半位からで、次第にその数を増し音楽大学の作曲科で在席の半数近くまでのぼっているところもあるようです。又東京芸大の学理科は殆ど女性で占められ、女性の音楽評論家もぼつぼつといった形で、女性の苦手と云われた分野にもめざましく社会進出が続いています。

作られた作品を見たり、聞いたりして学生と接している時気がつくのは、ごく一般的に云って、男性に比べて消極的で教えられたことには忠実に勉強もよくするのですが、意外性・応用力に乏しい。つまり面白く

ない場合が多い。も一つ構成力が弱くて目的意識がはっきりしない。ダイナミックな迫力に欠ける、等の欠点が見られますが、一方感覚的には大変優れたものをもって変化に強く、長い曲よりもむしろ小曲の集合体などに能力を発揮するといった点があります。生活環境の違いからか、女性は社交的だが社会的でない、といったことがよく云われますが、多少関連性があるのでしょうか。この言葉が死語になった頃を期待しています。

10年ほど前にフランスで二年間生活をしました。当地の人々には意見の交換、行動、思考など男女差があまり感じられず、女性の殆んどが職業をもっており、就職が結婚の有力な条件であり、これは若い人達が経済的に二人の収入を合算して生計をたてて行かねばやっていけない、といったことにも関係があるようです。女性が活発で生き生きしているといった点で東洋的な「謙譲は美德」とは相容れない土壌である事を、ポーポワールや、伊藤整の女性観で育った年齢層の人間にもひしひしと感じさせてくれました。

また音楽の話にもどりますが、ラテン系の国々の街角で聞こえてくる歌声、本当にあちらの国の人々はよく歌います。日本人女性はともかく男性はどうでしょう。最近ではカラオケで少しは歌う人もいますが、歌がいつでも、どこでも、軽く口ずさんで出てくるような環境に日本社会はなれるでしょうか？

(大学研究所長、音楽学部教授)

住んで、見た、パキスタン

中野泉

息苦しいほど蒸し蒸しする朝、家の前のモスクから流れてくるコーランの響きで目を覚ました。深夜から始まった停電は、朝日が昇りきっても復旧していないらしく、冷房は石のように黙りこくったままだ。午前6時、気温は優に30℃を超えている。私の長い髪の毛が首の汗に張り付いている。シャワーを浴びようにも、電気ポンプも停止中で水も思うように使えない。

1991年7月、夫の赴任に伴い、私はパキスタンにやって来た。この国の首都、イスラマバードでの生活が始まった。

空港に着くなり、「Taxi?Taxi?」と怒ったように叫ぶ男達に囲まれた。皆が皆、パジャマのような服(シャルワール・カミューズ)を着ている。客を確保しようとする2~30人の運転手の熱気と、ガスバー

ナーから吹き出ているような熱風をかき分けて、用意されていた車で市街に出た。

鈴なりに客を乗せたバス、赤、青、黄色、派手な色使いで装飾を施したトラック、煙をあげるリキ車、凹凸だらけの自家用車。あちこちでクラクションが連呼している。道端には背中に煉瓦を積んだロバが行く。黒光りの水牛の一行が斜め横断するかと思えば、山羊の親子が急に走り出したりする。砂糖きびジュース屋のワゴンに群がる親子、木陰で昼寝する髭ぶらの若者。お父さんは前に後ろに3人も子供を乗せて自転車走らす。クーラーのよく効いた車の窓の向こうに流れるパキスタンは、射すような太陽の下でも元気がよい。

ところが、あまり女性を見かけない。自動車の中、バスの最前列などには鮮やかなプリントのシャルワール・カミューズで全身を包んだ女性を見かけるが、道を歩いている女性はほとんどいない。

「やっぱりそうなんだ」。私は日本を発つ前に聞きかじっていたイスラム教国のイメージを思い出した。一夫多妻制、ベールを被った女性、ハーレム。女性が抑圧されている国、パキスタン回教共和国…。やがて車は住宅街に入った。前任者から引き継いだ家では料理人、庭師、運転手、掃除夫が私達を待っていた。全員男性だ。

突然の停電にも、一日5回鳴り響く「アッラー、アクバル〜」にも慣れた頃、私は気づき始めた。パキスタン女性の置かれている状況は、私が思っているよりずっとずっと複雑なのだ、と。

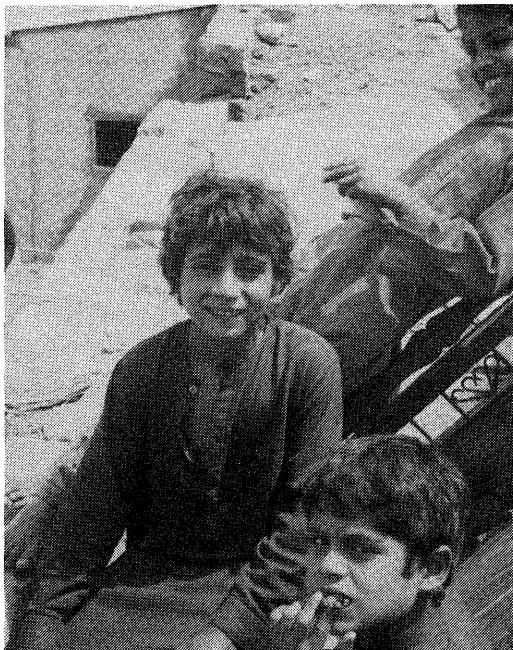
11月上旬の土曜日、夫と私は近くの村の結婚式に招待された。「牛小屋かな?」と思いをがらくぐり抜けた土壁の裂け目(これが門だった)の向こうに、いくつかの土製の小屋が集まっていた。ここが新婦の家で、親族同士、数家族が集まって生活している(Joint Family System)。披露宴会場となる中庭には幾何学模様の天幕が張られていた。

一般的に披露宴では男性客と女性客は別々の部屋に案内される。夫は入口近くの部屋に足止めされ、私だけが奥の花嫁の部屋へ通された。

花嫁は金モールの縁どりの真っ赤なベールを被り、部屋の隅にうずくまっていた。20歳になる彼女を、子供をあやすように祖母や叔母、年長の従姉妹らを取り囲んでいる。挙式の際、花嫁は笑ってはいけない。終始うつむいたままだ。この部屋の前では、嫁入り道具の披露が行われていた。中年の女性が踏台に乗り、衣類、宝石、鞆に靴、食器類など一つ一つ高く揚げながら参列者に見せている。

花嫁の父親は外国人の下で運転手として働いている。月収は3,000ルピー（'91年当時約15,000円）で、パキスタン人の平均月収にほぼ等しい。妻、5人の子供、年老いた母を養っている。借金せずには娘を嫁がせる準備もできない。

一部の地域を除いて、花嫁側は多額の持参金（Dowry）を準備しなくてはならない。伝統的には99着の衣服と数セットの宝石類などが。政府は持参金規制法のようなものを出してはいるが、花婿側の要求はエスカレートする一方で、また花嫁側の見栄もあり、最近ではテレビにエアコン、自動車などを準備する家もあるようだ。



口バを操る少年たち（カラチにて）

着飾ってモリモリご馳走を食べる参列者の華やぎとは対照的な花嫁の伏せたままの目と、年齢以上に老けて見える彼女の両親が気になって、私はお祝い気分を味わえなかった。

パキスタンでは男の子が生まれると爆竹を鳴らして喜ぶという。女兒誕生が続く家では、持参金準備の負担にあえぐ一方で、跡継ぎができるまで子供をつくり続ける。パキスタンの人口増加率を押し上げている一因である。若いうちに結婚し、子供を産み育て、家において家族のために働くこと。それがパキスタン女性に課せられた役割なのだ（この国の女性は、平均6人もの子供を産んでいる。そのうち20%の子供が5歳になるまでに死んでしまう。人口増加率は3.1%と公表されており、アジアの中でも高率の増加国に属している）。

さらに農村地域の女性は、一日に何時間もの農作業をこなさなくてはならない。パキスタンでの女性の就業率は13%と報告されているが、国民のほとんどが生活している農村では、少なくとも7割以上の女性が、男性並の肉体労働に就いていると言われる。

23歳のパキスタン女性。父親は役所に勤め、2LDKの官舎に住んでいる。内緒話があるという。これで2度目だ。最初は彼女の秘密の写真。「お父さんには絶対内緒」といって見せてくれたのは彼女の妹と撮影しあった「洋装」スナップだった。ロングではあるけれど、スカートをはいている。Tシャツにジーンズという大胆な格好のものもある。物心ついた頃から、ずっとシャルワールを着なくてはならないパキスタン女性。二の腕もふくらはぎもご法度だ。これら「変装」ごっこは、彼女らのささやかな反抗だったのだろうか。

その彼女の2度目の告白は「私、婚約したの」。私が「おめでとう」と言い終わらないうちに彼女は続ける。「もう楽しみは何もない」。婚約者は父方の従兄弟だという。好きも嫌いもない、これからはあちらのファミリーの嫁として生きるだけ…。

'93年秋、ベナジール・ブット女史がパキスタンの首相に返り咲いた。自国の首相を指して21歳の女子大生は言う。「ブットなんてパキスタン人じゃないわよ」。

ブットは英語で教育を受けており、母国語であるウルドゥー語は苦手のような。テレビや写真で見かける彼女の肌は、パキスタンの太陽の下でもとても白い。カラチ（彼女の出身地）の水は飲めないと、エビアンを持ち歩いているという噂も聞いた。海外にも住居を持ち、子供も国外の病院で出産している。「彼女はパキスタンのことなんて真剣に考えてないと思う。心はいつも海外よ」。

そういう女子大生もTIMEやNewsweekを定期購読し、ハリウッド映画にも詳しい。彼女の当面の目標はアメリカに留学することだ。

パキスタン人の識字率は34%、女性の場合は20%にも満たない。小学校に入学できる女の子は3割そこそこ、中学校にいたっては1割ほどだ。いずれも男子の就学率より1割前後低い。

つまり大学で勉強できるのは、ほんのひと「つまみ」のエリート女性なのだ。現に高等教育を受けた女性達は、官僚、医者、教師などとして活躍している。

「それでも、留学は無理かもしれない。父は私に一日も早く結婚してほしいと思っている。もちろん父が選んだ相手とね」。モスクのスピーカーから夕方のお

祈りが流れてきた。女子大生はさっとドゥパタ（薄手のショール）で頭を覆った。

わずか2年足らずのパキスタン体験だったけれど、ここで見たもの聞いたこと、出会った人々を、私はとても消化できない。

パキスタン社会のいくつもの面に、かつてのあるいは現在の日本の社会制度を見る思いがした。一方で、イスラム教をよりどころに、いくつかの階層に分かれ、様々な民族が生活しているのを目の当たりにすると、分からない事だらけで、思考が停止しそうになる。

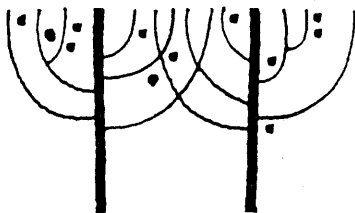


毎週金曜日にたつ青空市
(イスラマバード市内)

パキスタンがイギリスから分離独立して、もうすぐ半世紀を迎える。社会問題、経済問題、増えることはあっても減りそうにない。

古代インダス文明発祥の地、ガンダーラ仏教美術が栄えた地域、パキスタン。豊かな大地に抱かれて、しかし国の行く手はぼんやり霞んでよく見えない。パキスタン女性はどこへ行くのだろう。

40℃を越す夏の昼間も、零度を切る冬の朝も、大声でしゃべり、大いに食べ、そしてよく眠るパキスタン人の「元気」を信じたい。(団体職員) [大I106]



「やぎの会」へようこそ

永山聖子

「ネェネェネェ。」——あっ、まただ。悪魔の誘い声が聞こえる。以前にも彼女に誘われてアジア方面へ旅行へ出かけたが、それはもうどえらい旅だった。

(実はしっかりと楽しんだのだが) 今度は何だ。「ネェネェ『やぎの会』」に行ってみない。お昼休みにやってみよう。」

あれから一年がたった。つくづくやぎの会に入って良かったと思う。

入ってすぐにバザーの準備に加わった。恐る恐る手漉き葉書き作りに挑戦してみた。材料は勿論、ロッカールームのやぎの会のポストから回収した牛乳パックだ。「こんなんホンマに売れるんやろか?」の心配をよそに手作り葉書きは他の、再生紙から作られたレターセットやティッシュペーパーと共に瞬く間に売れてなくなっていったのだ。ふうーん、これ程世間では環境問題への関心が高まっていたのか。それとも看板娘がいたからか。大成功のうちにバザーは終わった。そして次にやって来たのが勉強会。'92地球サミットについて発表してほしいとの事。そう、やぎの会は「環境問題を考える会。だから時には週交替で発表会をする。内容は先のサミットから Green English まで幅広い。おかげで英語の語彙が増えた(気がする)。秋の学祭の時にはテーマ「環境」で学院内の先生方のオール・キャストでビデオを製作した。「岡田山の西側斜面防災工事」から「中国の環境問題」とローカルからグローバルまでテーマは多岐に渡り難しく、おもしろかった。

気がつけば、毎週水曜日のお昼休みにはD館3階の「やぎの部屋」にいる。時間の大半は弁当とコーヒーと雑談で過ぎてゆくのだがちゃんと環境の事を考える。考えないよりは考えた方がいい。やらないよりはやった方がいい。そんな風に私の考えは少しずつ変わってきた。過剰包装は勿体ない気がする。コピーはちょっと控えたい、ティッシュはお花の香りのカシミアの手触りでなくても構わない、車よりは電車がいい。環境問題を考えるのに、大時代的態度や世間に物申したりしなくていいと思う。持続可能な努力から始めたらいいのだから。(総合文化学科3回生)

◎毎週水曜日の昼休み、D-302で集まりを持っています。(または随時女性学インスティテュート [D-303] まで。) 興味のある方は一度のぞきに来てみてください。

『女と男』

井上紀子

人間の長い歴史の中で、スポーツの位置づけは、おとこのものでした。男社会に戦いがつきものである時代に、男のために色々なルールが作られ、男らしくあることの1つの「かたち」として表現されてきました。その当時の女は、勝者のための捧げものでしかありませんでした。女は社会の弱者としてあつかわれ、スポーツの世界も、参加することのできない時代が長く続きました。

おんなもスポーツの観衆になることから許されてきました。

おんながスポーツ、おんなにスポーツといわれながら参加者となるまでの長い道程を歩んできたのです。

精神的にも、肉体的にも健康な生命を生みだすもとであるおんなが、「スポーツには不向きである」といって続けられてきました。

おんなもスポーツという時代を迎えるには、おんなの努力なくして語ることはできません。

おんなのスポーツとして長い間ダンス（遊戯・体操）が位置づけられ、好きも嫌いもなくあてがわれてきました。ここにも「～らしく」が見え隠れします。

おんなにスポーツをノと変化が起きてまだ20年です。日本では1980年以降であるといえるでしょう。おんなのスポーツとして位置づけられていたはずのダンスにおとこも参加してきました。（エアロビクスダンス・ジャズダンス・ブレイクダンス etc.）大変化です。

あくなき女達は、男達にしか許されていなかったスポーツに挑戦し続けています。（マラソン・サッカー・レスリング・ボクシング・ウエイトリフティング etc.）女と男の垣根をとりはらう努力の歴史そのものです。

持久力を必要とするマラソンに至っては、おとこにおんなが追いつく時代は今世紀末かノ夢ではない、と衝撃的な記録が載っています。

おとこにおんなが勝負する時から、おとこにおんなが勝負する時代も、そんなに遠くないかもしれない。…と思いつつエプロンをかけ、おとこのために料理を作るおんなは、母・妻という名前をもった、おんなのスポーツ（ダンス）を愛し続ける一人のスポーツウーマンである。

(体育研究室助教授)

『女と男』

橘 茂

「ドン・ジョヴァンニはツェルリーナを口説きおとせたか？」

どんなオペラにも「女と男」の話はつきものであるが、モーツァルトのオペラ「ドン・ジョヴァンニ」ほど「女と男」をあからさまに描いた作品はない。イタリアで640人、ドイツで231人、スペインでは1003人と女を次から次へと口説くドン・ジョヴァンニ。「女と男」の関係は様々である。ツェルリーナはドン・ジョヴァンニにとってどんなタイプの女性だったのでしょうか？ ドン・ジョヴァンニはいつでも女を口説くとき、自分の今までのパターンにはめて実行するはずである。でもこのツェルリーナという女性はどうも今までのどの女性のパターンにも当てはまらなかったのではないだろうか。それが証拠に、このオペラの中でドン・ジョヴァンニはツェルリーナに近づきはするが、いつもいいところですかされてしまう。いつも上手に女性と遊ぶはずのドン・ジョヴァンニが逆にツェルリーナに手玉に取られるのである。

「女と男」の上下関係。これも興味深い問題である。年上の方がいつも主導権をにぎっているわけでもないし、ましてや男でもない。往往にして年下の女性の場合もある。これはよく聞く話である。男は年下の女に弱い。それも年の差が大きい程その度合も増す様である。

話をドン・ジョヴァンニとツェルリーナにもどすと、彼は無垢な娘を誘惑するという楽しみがあった筈である。しかしその相手の方が自分よりも賢かったのである。これでは敵わない。でもそうなるとかえって男は魅力を感じてしまって深みに入って行くものである。

結局ドン・ジョヴァンニは今までの数多くの女性とは違って、彼女を恋してしまって、口説くことは出来なかったのではないだろうか。（音楽学部専任講師）



1993年度年間活動報告

I 講演会

アメリカ研究フォーラム 1993年4月6日(火)

「アメリカ社会と女性の役割

～雇用賃金格差の変遷を中心に～

アリス・ケスラ＝ハリス博士(ラトガース大学女性学研究所ディレクター、アメリカ学会会長)

*大阪アメリカンセンターと共催にて開催

座談会 1993年6月11日(金)

「女性的男らしさ、男性的女らしさを求めて」

石浜みかる氏(作家、かながわ住まい・まちづくり推進協議会常任研究員)[大E82]

講演会

第1回 1993年6月22日(火)

「プロの女性——ネパール王国のをんなたち」

立石紀子氏(大阪大学医学部附属バイオメディカル教育センター所属、同学医学部学内講師)[大H77]

第2回 1993年7月7日(水)

「カンボジアでの一年間の選挙活動をふりかえって
～これからの国際貢献を考える～」

米川正子氏(国際ボランティア・選挙監視員)

[大E107]

第3回 1993年12月2日(木)

「フェミニスト心理学・フェミニストカウンセリングの動向」

川喜田好恵氏(大阪府立婦人会館カウンセラー、大阪女学院短期大学非常勤講師)[大E87]

報告会 1994年1月13日(木)

「ベラルーシの大地と人々

～チェルノブイリ汚染地救援報告～

大田美智子氏(チェルノブイリ・ビバクシャ救援関西事務局メンバー)[大S94]

II 助成研究

「1990年代の黒人女性作家の意識」

風呂本惇子[英文・教授]

「文学に表象された<女>という経験」

渡部充[英文・専任講師]

III 学会等出張補助

*国立婦人会館主催女性学講座(埼玉県:1993年8月27日～29日)に出席。 本城智子[英文・教授]

*東京女子大学主催ウェズリー・カレッジ女性学センター副所長との懇談会及び講演会(東京都:1993年12月6日)に出席。 風呂本惇子[英文・教授]

IV 出版物

『女性学評論』8号 特集:近代化と女性問題

(1994年3月31日発行予定)

V AWI(The Asian Women's Institute: アジア女性研究所)との交流

*本城智子女性学インスティテュートディレクターがAWI執行委員会(パキスタン・ラホール:1994年2月24日～26日)に出席した。

VI その他

*学生活動に対する補助:「やぎの会」(環境問題を考える会)の諸活動に対し支援を行った。

図書・資料をご利用ください

女性学インスティテュートでは、女性学関係の図書および資料の閲覧・貸出を、下記の要領で行っています。

◎開室時間 月～金 8:30～16:30

(但し、11:45～12:45は除く。)

*夏・冬期休業中の一定期間は閉室となります。

◎利用資格 本学教職員・学生・卒業生

◎収集分野 心理・法律・労働・メディア・人権・女性論・女性史・家族・パートナーシップ・ライフスタイル・性・からだ・環境・文学

◎閲覧 開室時間中は自由にご覧ください。

◎貸出期間 2週間

◎貸出冊数 8冊まで

◎検索方法 図書目録カードBOXを当インスティテュートおよび図書館新館1階に設置しています。また、当インスティテュートではコンピュータ検索も可能です。

※ 閲覧・貸出希望者は、デフォレスト館3階303号室(D-303)まで

1993年度女性学インスティテュート編集委員

風呂本惇子、本城智子(委員長)、飯田正紀、井上紀子、上野輝将(ABC順)

編集・発行:神戸女学院大学女性学インスティテュート

〒662 西宮市岡田山4-1 ☎(0798)51-8545